

握手（要約） 井上 ひさし

中学3年から高校卒業まで仙台の天使園という児童養護施設にいた「わたし」が、戦前にカナダから来日してその園長をしていたルロイ修道士と料理店で久々に会って話す。昔は痛いほどだったルロイの握手は今は実に穏やかで、二人はなつかしい昔話に花を咲かせる。やがてルロイが「わたしはあなたを打（ぶ）たなかったか」と尋ねたり、仕事がうまく行かないときは、「困難は分割せよ」の言葉を思い出せ、などと言い出すので、「この世の暇乞い」に回っているのではないかとわたしは感づく。

別れ際に「死ぬのは怖くありませんか」

と尋ねると、天国が「あると信じる方が

たのしい」、そのために「神様を信じてきた」という。

わたしがはげしく握手すると、「痛いですよ」とルロイ。

やがてルロイは仙台の修道院で死んだ。



トラピスト修道院（北海道）

ルロイ先生への「弔辞」

使用教材：「握手」（三年）

授業づくりに役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載。今回のご担当は、甲斐利恵子先生（港区立赤坂中学校教諭）です。



東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子
福岡県生まれ。専門は国語科単元学習。光村図書中学校【国語】教科書編集委員。著書に、『聞き手話し手を育てる』（共著・東洋館出版社）など。

【ねらい】

- ・人物像をまるごとつかんで表現する。
- ・語り手の心情に寄り添って読む。

「握手」を読むたびに、「ルロイ先生！あなたって人は……」と語りかけたくなる。この湧き上がってくる感情をどんな形にすれば子どもたちと語り合える授業になるかと、ずっと模索してきたように思う。

ステイプ・ジョブズが亡くなった二〇一一年、世界中の人たちが彼のことをいろいろなスタイルと言葉で語っていた。どれを読んでも彼のすごさが伝わってくる。ある雑誌に「ステイプ・ジョブズ その生き方の法則」という文章があった。語りたい人を「法則」という視点で読み解いていく方法だった。彼の価値観を深く掘り下

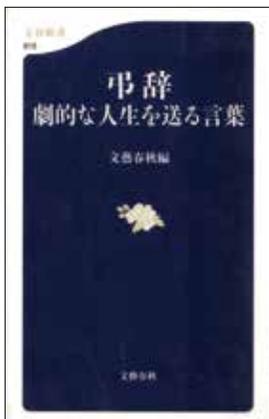
げて語るその語り方に心を奪われて、「ルロイ修道士」その生き方の法則」という単元を考えた。学習は、ルロイ修道士の行動、心情、価値観に迫るものになった。だが、何かが「違う」気がした。

翌年は、新聞の人物紹介コラムの存在に気づき、人物の魅力を語る力をつけるための単元を考えた。学習は、まずコラムの分析から始まる。用意された多くの新聞記事から、人物の魅力を語る切り口を分析した。その分析した切り口で、子どもたちはルロイ修道士を文章で語る。ルロイ修道士の言葉一つ一つが人物像を物語っていた。人物像を捉えるということは観点をもつことだと学んだ。だが、「違う」という微かな感覚は拭えなかった。

そして次の年、「弔辞」に挑戦した。弔

辞なんて、子どもの世界には無縁でしょ？

子どもに押しつけることにならないの？と、多くの不安を感じつつ書店を歩いた。そのとき出会ったのが「弔辞 劇的な人生を送る言葉」（文春新書）だ。この中に、タモリから赤塚不二夫への弔辞があった。すばらしく整った構成だった。たくさんの時間を共に過ごした人にしか語り得ない愛情があふれていた。自分を育ててくれた人に対する感謝の思いがエピソードを交えながら語られていた。赤塚の言葉が魅力的に引用され、その価値観が的確に表現されている。何より、赤塚を心から敬愛する人としてそれを語るタモリが、ルロイ先生を亡くした「わたし」と重なると思った。学習はこの弔辞を読むことから始まった。「違う」という思いは、ようやく払拭された。



弔辞 劇的な人生を送る言葉

文藝春秋 編
文春新書 / 2011年

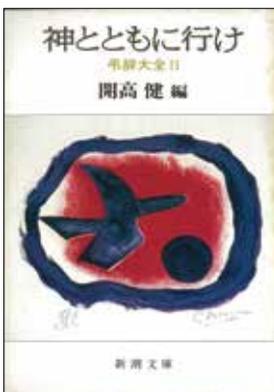
取り上げられている故人は、司馬遼太郎、渥美清、筑紫哲也、木村拓也など、各界で活躍した人々50名である。故人との深い交流があり、心から敬愛しているからこそ語られる言葉がここにある。



弔辞大全Ⅰ 友よ、さらば

開高 健 編
新潮文庫 / 1986年

編集した開高健は後書きで、弔辞を「たった一回しか死ねない人に贈る たった一回しか書けない作品」と述べている。夏目漱石の死を悼む芥川龍之介の文章など、明治・大正・昭和の作家たちの名文集である。



弔辞大全Ⅱ 神とともに行け

開高 健 編
新潮文庫 / 1986年

樋口一葉の才能をいち早く評価した評論家による「あの一葉女史逝けるか、あ女史は逝けるか」で始まる一文は、文学の小品を読んでいる感覚になる。寺山修司へ向けた唐十郎の惜別の辞など50編を収める。



悼む詩

谷川俊太郎 詩 / 正津 勉 編
東洋出版 / 2014年

谷川俊太郎の紡ぎ出す言葉が「悼む」という心を伝えている。ジョン・レノンに、武満徹に、石垣りんに、河合隼雄に。30余名に捧げる詩。東日本大震災から2年後に発表された「そのあと」も収録されている。

そう怖くはありませんよ

早稲田大学教授

森山卓郎 もりやま たくろう

井上ひさしの「握手」。私は、この作品で造型されている「ルロイ修道士」の人物像が好きだ。特に、最後の別れの会話はなかなかのものだ。

上野駅の中央改札口の前で、思い切ってきた。

「ルロイ先生、死ぬのは怖くありませんか。わたしは怖くてしかたがありませんが。」

かつて、わたしたちがいたずらを見つかったときにしたように、ルロイ修道士は少し赤くなって頭をかいた。

「天国へ行くのですから、そう怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。(略)」

「死ぬのは怖くありませんか」に対する返答が、「そう怖くはありません

よ。」「怖くはない」という全否定ではない。信仰に生きているはずの修道士だが、「人」としてあくまでも正直だ。「本当に天国がありますか」への答えも「あると信じるほうが楽しいでしょうが」である。「一人の人」としての率直な視点と言えるだろう(ちなみに聞き方も、一般論的な話としての「天国は」ではなく「天国が」となっている。「死んでからその人が行く所として、天国があるかどうか」を話題にしているというニュアンスがある)。

そういえば、別のところでも、「一人一人の人間がいる、それだけのことでですから。」という言葉がある。強烈に「人」の「一人一人」を取り上げるのだ。さらに、「ルロイのこの言葉をお忘れなください。」というのが、信教に関連する言葉ではなく、「困難は分割せよ」というふうの「生き方」に関わるものである(私はこの作品で

この言葉を知った。生きる力につながるいい言葉だ)。

レストランの会話では、戦中の話、オムレットの話のあと、「それよりも」で切り出されるのが、「わたしはあなたをぶつたりはしませんでしたか」という内容だ。「それよりも」は、前の話題をすつとばして大切なことをきり出す転換である。「ひどい仕打ちをしていたなら、謝りたい」という強い思いがそこにはある。「人」を本当に大切にしてきた「ルロイ修道士」の造型が、言葉の端々に見事に息づいている。この作品では、指言葉、握手、表情や仕草などのボディランゲージも大切だが、会話そのものの含蓄も実にいい。生命が輝く季節、葉桜が終わるころ、修道士は「なくなつた」。今年は、この登場人物の言葉をかみしめつつ、葉桜の下を少し歩いてみようと思つている。